

イエス：かしらであり救い主である方

1:18 また、御子はそのからだである教会のかしらです。御子は初めであり、死者の中から最初に生まれた方です。こうして、ご自身がすべてのことにおいて、第一のものとなられたのです。
1:19 なぜなら、神はみこころによって、満ち満ちた神の本質を御子のうちに宿らせ、**1:20** その十字架の血によって平和をつくり、御子によって万物を、御子のために和解させてくださったからです。地にあるものも天にあるものも、ただ御子によって和解させてくださったのです。
1:21 あなたがたも、かつては神を離れ、心において敵となって、悪い行いの中にあつたのですが、**1:22** 今は神は、御子の肉のからだにおいて、しかもその死によって、あなたがたをご自分と和解させてくださいました。それはあなたがたを、聖く、傷なく、非難されるところのない者として御前に立たせてくださるためでした。**1:23** ただし、あなたがたは、しっかりとした土台の上に堅く立って、すでに聞いた福音の望みからはずれることなく、信仰に踏みとどまらなければなりません。この福音は、天の下のすべての造られたものに宣べ伝えられているのであって、このパウロはそれに仕える者となったのです。

教会の本質とは何でしょう？クリスチャンのほとんどが教会について深く考えません。教会の一部であることを喜びとし、教派の違いについては少し知っていたとしても、それ以上のことは重要ではないかのようです。教会とは何なのかについて聖書の教えをまとめようと何度も教会の歴史で試みられてきました。新約聖書で教会を指すギリシャ語に注目することから、聖書の中で教会について述べている隠喩に注目することまで、教会とは何なのかを定義しようと多くの力が注がれてきました。教会には見えるものと見えないものがあります。それに加えて、地域の教会もあります。さらにはもっと多様な異なる教会を加えることもできます。混乱してしまいそうです。今朝の聖書箇所はこの全ての疑問には答えていませんが、一つの重要な疑問に対して有無を言わせぬ回答をしています。教会は誰のもとにあるのか？ということです。コロサイ一章にあるイエスのご性質を引き続き見ていくと、パウロはイエスが教会のかしらであり救い主であると宣言しています。イエスは万物におけるかしらであり権威ですが、特にご自身が贖われ、召された人たちの内にあつてそうであられます。私たちはイエスに対して最高の忠誠を尽くします。牧師やリーダーたちはすべてにおいて自分自身をキリストとキリストの言葉に服従させるべき者です。それぞれの教会が独特のスタイルを持ち、他教会との関係の深さも異なります。けれども私たちすべてが、ご自身の血によって教会を買い戻された救い主に自分自身をお捧げするよう努力しているべきです。イエスは救いの希望であり、イエスは教会のまことのかしらです。

コロサイ **1:18-23** に注目するにあたり、神の御子とは誰なのか、どうしてそれがクリスチャンにとってそんなに重要なのかということを思い出したいと思います。

イエスは教会のかしら(18-19 節)- 「1:18 また、御子はそのからだである教会のかしらです。御子は初めであり、死者の中から最初に生まれた方です。こうして、ご自身がすべてのことにおいて、第一のものとなられたのです。 1:19 なぜなら、神はみこころによって、満ち満ちた神の本質を御子のうちに宿らせ、」

イエスは世を治める方です。イエスの無限の支配は、創造された万物の内に見られます。イエスは世を治める方であるので、当然、人間に関わる制度を全て治める方でもあります。意思決定において三位一体の神に応答しなくても良い政府などありません。すべての権力とそれを振るう者は、その地位を神から与えられました。そしてその権力を持つ者たちの義なる行動によって、また神ご自身がこの世に正義をもたらされる終わりの時、神の真実が示されるのです。

18 節でパウロは、イエスが教会のかしらであると言っています。ある意味、この宣言は重複しているようにも見えます。パウロは既にすべての創造物と創造物の内にある力が神の御子のもとにあると述べたからです。イエスが教会のかしらであるということを実際立たせるのは何でしょう？一つの考え方として、教会が世の権力や制度のようではないことが挙げられます。特別な方法によって教会は神の働きからなっています。

出エジプト記を思い出しましょう。神は、民をご自身のものとするために贖うべく働かれました。イスラエルの民は紅海を渡り、神のご臨在が留まって彼らを導きました。最終的にイスラエルの民は約束の地へ入りました。民が神と、神が彼らと共に生きることができるよう、神の契約の人々は束縛から解放されるべく導かれたのです。けれども、イスラエルに与えられたいけにえには問題がありました。雄牛や山羊などのいけにえでは実際に人間の罪を覆うことができなかつたのです。イスラエルがくり返しささげたいけにえは、彼らが神の救いの約束に信仰を置くよう召しました。いけにえ自体ではなく、神こそが彼らの信頼するものでした。更に、神の民はもっと良いかしらが必要としていました。旧約の王たちは誠実ではありませんでした。

18 節でパウロは、愛する御子（コロサイ **1:3**）は教会というからだのかしらであると述べています。これは特別な関係です。すべてのものの上にあるイエスの支配とは異なります。この世を治めるということはイエスの本質の一部ですが、教会のかしらであり、教会を治める方であることはもっと親密なものです。イエスはその血によって教会でのご自身の地位に証印を押されました。**15 節**の「先に生まれた方」と同じように、ここで「死者の中から最初に生まれた方」とイエスと呼ぶことでイエスが教会にとって第一であることが強調されています。永遠の御子の創造における役割は、全てを造ることでした。その永遠の御子は人となり、死に、そして復活されたのです。御子の死と復活を通して、御子は死に打ち勝ちました。罪の呪いが打ち砕かれたのです。ですから、最初の創造においても、教会においても、永遠の御子がすべてを治めるのです。御子と教会には深い親密性があります。たとえ罪によって腐敗した部分でもあっても、すべての創造物がイエスの権威のもとにあります。創造において、御子は神のすべての力と権威を世にもたらされます。

復活のうちに、そして教会において、御子は神のご臨在を教会にもたらしめます。イエスは教会において第一の存在です。受肉されたことがイエスの地位や力を変えることはありません。永遠の御子は、ご自身の創造の一部になるために自分を低くされました。しかしイエスのご性質は変わりませんでした。神の御心によって神の満ち満ちた本質がイエスに留まっていたのです。つまり **15 節**は **18 節**と何も変わらないということです。いずれも世を造り、治められる同じ御子

について話しています。イエスはまたご自身の死と復活によって、第一のかしらとして教会を治めます。死と復活によってどうしてそれが可能なのでしょうか？20節に理由があります。

イエスは世の救い主(20-22 節)- 「1:20 その十字架の血によって平和をつくり、御子によって万物を、御子のために和解させてくださったからです。地にあるものも天にあるものも、ただ御子によって和解させてくださったのです。 1:21 あなたがたも、かつては神を離れ、心において敵となって、悪い行いの中にあっただのですが、 1:22 今は神は、御子の肉のからだにおいて、しかもその死によって、あなたがたをご自分と和解させてくださいました。それはあなたがたを、聖く、傷なく、非難されるところのない者として御前に立たせてくださるためでした。」

イエスのご自身の死と十字架を通して平和を作られたのです。本当に驚くばかりです。罪が世を掴み、人間を束縛していました。罪が死をもたらし、墮落へと導き、悲しみが世に入り込んだのです。出エジプトについて先ほど触れました。イスラエルの人々は束縛と苦しみから自由へと導き出され、神のご臨在のうちに生きるようにされました。それは御子が教会のためにしてくださることと同じです。罪深い人間は罪の束縛から自由にされなければなりませんでしたが、世に存在する罪への対処法がありませんでした。罪が私たちを奴隷とし、死と裁きをももたらしました。神の命令への不従順と背きを通して、罪が世に入ったのです。罪のために人間と神の間には敵意がありました。神と人間の間には平和を作るために何かが必要がありました。罪深い人間の代わりに十字架上で死ぬことで、御子はそのなされるべきことを行ったのです。これが 20 節で和解と言われているものです。

神と人間の間にある敵意に対処するのに、妥協はありませんでした。神が罪深い人間と机で向き合って値段交渉をするようにしたわけではありません。神の基準は 100%の従順でした。完全にお捧げすることです。人間がその机へ行って何か頼む余地もありませんでした。イエスの死が天と地の間に和解をもたらしたのです。この死の本質について知ってもらいたいと思います。それは力強いものです。単に天と地の和解の機会を造り出したのではなくそれを成し遂げるのです。前述の永遠の御子の権威と力についての宣言と同じように、20 節は御子がすべてのものを和解させると述べています。神との平和が可能だけでなく、保証されています。イエスは神と人間を和解させました。それは確かなものです。つまりイエスを信頼する者はすべて、神との平和が保証されているのです。神と和解するためにあなたが何をするかではありません。なされるべきことは既にすべてなされたのです。実際、もしも神と和解するために私たちに何かすることが残っていたとしたら、私たちはそれを満たすことはできないでしょう。21 節は、神と和解する前の私たちの本質がどのようなもので、なぜ神との関係を正すために何かをすることが不可能なのかを教えてください。パウロは、私たちがかつて神から離れ、心において敵であったと言っています。私たちは悪い行いに囚われていました。イエスの和解的な死が人間に救いをもたらすのです。その和解には目的があります。イエスが私たちのために死なれたのは、私たちが神の御前に聖く非難されるところのない者となるためです。神の御前に聖く非難されるところのない者となるのは、罪深い人間にとっては不可能です。私たちはイエスが実際に十字架上でなされたことに何度も何度も目を向けなくてはなりません。イエスの死は私たちを聖く非難されるところのない者としめます。しかし 23 節を見てみると、聖くされることは継続

的な過程であるとわかります。イエスが人間にもたらされる救いは完全で完了されています。救い主であるイエスに信仰を置くことで恵みによって私たちが救いに入る時、私たちは聖く非難されるところのない者とされます。救いの瞬間が神の働きの終わりではありません。神の特別な目的のために取り置かれるという目的で私たちは和解されました。聖書の他の部分では、クリスチャンは神の使節と呼ばれています。(コリント第二 5:21) クリスチャンは良いわざのために召され(エペソ 2:10)、福音を国々に述べ伝え(マタイ 28:19-20)、神がどのようなお方なのか世に示すために、神の御前において特別な祭司の職に召されているのです(ペテロ第一 2:9-10)。

キリストにとどまる(23 節)-「1:23 ただし、あなたがたは、しっかりとした土台の上に堅く立って、すでに聞いた福音の望みからはずれることなく、信仰に踏みとどまらなければなりません。この福音は、天の下のすべての造られたものに宣べ伝えられているのであって、このパウロはそれに仕える者となったのです。」

このように書いたパウロは、愛する御子の御国の一員になるということがどういうことかという基本的をコロサイ教会に教えたかったのです。また御子への信仰の中心にあるものは何であるかについて自分の考えを述べています。教会を怖がらせようとしていたではありません。23 節は警告のようにも聞こえます。逆の言い方をすれば、「もしも福音の信仰に忠実で居続ければ、天と地の間にキリストが作られた和解にあずかれなくなる」ということです。「ただし...信仰に踏みとどまっていなければなりません」という強い表現が使われています。けれども、コロサイ教会の心に恐れや疑いを与えようとするのがパウロの主旨だったとは思えません。結局のところパウロが述べているのは、御子が完全なる主権あるかしらであるということです。私たちが実を結んでいる時には救いの深い確信があるということがポイントです。神の御前で聖く非難されるところがなく、傷のないものというのは、誠実に生きている時に現実味を帯びます。けれども、自分のために人生を生きるならば、それは不可能なようです。次の章でパウロは、教会が直面している問題について触れています。憂慮していたことの一つは、高まりつつある偽りの教えでした。偽りの教えについて述べるのは容易ではありません。どんな見方も、聖書の教えのかのよう聞こえさせられるからです。根拠となる箇所がいくつか必要なだけです。先週、ほとんどの人が神学を深く知ることには抵抗があるとお話しました。たとえ悪いことであっても、自分の中で勝手に納得してしまって、他の人も説得できればそのことで神学の働きがまるごと空っぽにされてしまいます。最終的に自分が思うことを何でも作り出すことができますか？これがやっかいなのです。パウロによれば、聖書に自分が言って欲しいことをなんでも言うてもらうようにはできないのです。正しい神学というものがあります。パウロは「ただし、あなたがたは、しっかりとした土台の上に堅く立って、すでに聞いた福音の望みからはずれることなく、信仰に踏みとどまらなければなりません。」と言っています。もし、もう違う宗教のことを話しているかのようなレベルまで信仰から離れてしまえば、自分たちをクリスチャンと呼ぶことすらできません。

神学的な優先順位について聞いたことがあるかと思います。何があっても妥協してはならない要素があります。三位一体、処女懐胎、イエスの死と復活、聖書は靈感によること、信仰を通

して恵みによって義とされることなどがそうです。終わりの時に起こる出来事の順番など、まだ議論をする余地があり、それであってクリスチャンとしての交わりを保つことができることもあります。どの場合であっても、私たちは互いを愛し、優しさの霊をもって互いを正していくべきです。やさしさが必要なのは、もしかしたら次は自分が間違ってしまうかもしれないからです。教会の健康と信仰にとって偽りの教えが深刻な脅威であるように、誠実な生活にとってもそうです。

マルティン・ルターは「疑いを持つ時、洗礼を自分の救われた証として見つめる」と言ったことがあります。彼が言おうとしていることは、救いは恵みのわざであるから、人生のうちに神の恵みが輝いたその瞬間に、自分が真にキリストと結ばれたことがわかるということです。救いの目的と本質は、信仰によって一度キリストと結ばれたらもう救いを持っているのだから、それを疑うべきではないことを意味しています。イエスの教えの中には真理が溢れており、救いについてそのように考えることは大きな慰めです。しかし聖書は、信仰告白しながら最後には道から外れてしまう者に対して警告を与えることもあります。最後に救われるということは、誠実な告白と誠実な生活とに結びついています。事実、キリストに結ばれている者は、キリストから離されることはありません。一方で、罪深い生活を送ったり信仰を否定しては慰めを得ることはできません。パウロが言っていることに注目してみましょう。イエスにおいて偉大な救いがあります。キリストにとどまる者には大きな希望があります。もしもキリストにとどまっていたら、あなたにも大きな希望があるのです。迷い、弱さを感じているなら、それに背を向けて、キリストを見ましょう。偉大な救いはそのキリストの内にあるのですから。主はこの世の弱った人々をご自身に引き寄せることを思い出してください。主は心を痛める者、貧しい者、虐げられるものを引き寄せられます。死者の中から最初にお生まれになったキリストにあって、私たちには新しいいのちの希望があります。悔い改めを踏まえて実を結び続けなければなりません。しかしキリストから迷い出てしまったなら、また彼の元に戻るのが正解です。最後に、もう一つ教会の本質についてお話ししましょう。教会にしばらく来ている方なら、教会も多くの痛みを伴うものでありうるとお分かりでしょう。秩序が乱れ、悪くなった教会は私たちに色んな面で影響を与えることでしょう。私たちが覚えておくべき重要なことが 2 つあります。1. 「教会が人を傷つける時、その教会はまことのかしらを愛し、お仕えすることができていません。」2. 「罪を隠したり、埋めようとしたりはできません。」教会は私たちの救いでも希望でもありません。キリストが私たちの希望です。教会はクリスチャンにとって重要な部分です。私たちにはクリスチャンとして教会に直接結びついていくという義務がありますが、忠誠は教会のかしらに対してのもので、どの教会に属するかで私たちの忠誠心がどこにあるかが埋もれることはありません。私たちのすべては、私たちが神と和解するために死なれ、復活された救い主に結ばれています。もし教会がキリストに対してまことでなければ、福音を覚え、教会を呼び戻すのです。そのことで混乱が起こり、自分の地位や友達を失くすこともあるかもしれませんが、教会と私たちの人生の究極の目的は、最後にしっかりと堅くあることなのです。